

カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第4回 田中裕也氏 (建築学博士・実測家)

第4回は世界で唯一、ガウディ建築の実測図面を作製しバルセロナ、日本でさまざまな賞を受賞されている田中裕也さんです。建築設計図面のないガウディの建築物に向き合う「実測」という誰もやらなかった大胆なアプローチ。それはどこから生まれたのか?そこから話を伺いました。

AMICS まず田中さんがガウディの建築を実測し始めた経緯から伺えますか。

田中 自分は建築を学び、建築事務所に入りましたが、画の世界、美術の世界は好きではなかったんです。1978年にはじめてバルセロナに入り実測を始めました。建築家になるためには画を描くしかなく、自分なりの学び方で描いていくしかないだろう。測ることはできる。であればそこからやっていくしかない。グエル公園に行ったら座っている階段、この階段だったら測れるだろう。これだったら描けるよな、それがスタートです。階段を描き始めると次は周りに彫刻された植物を描く、植物の名が気になる、図鑑を調べる、なんでこの植物がここに置かれたのか、なんで?という好奇心がその裏付けを取ろうとする。それを繰り返していると「測る」ことが自分の人生の生き方につながってくる。いろんな分野で「測る」がありますよね。建築家の測る、科学者の図る、医者の方を、謀るというのもある(笑)人は皆測りながら生きている。今はそんな哲学のように思いますけど、当時は測るしか自分の方法が見つからなかったんです。そしてそれは誰もがやっていない方法だったんです。

AMICS ガウディの研究の世界的権威であったバセゴダ教授の研究室に入られるわけですね。

田中 1年半かけてカサ・パトリヨとカサ・ミラの実測図を描きました。その後一旦帰国してスペイン国費留学の道を狙いましたが、一度は体調をこわして断念します。81年に資格を獲得しカタルーニャ工科大学のガウディ研究室に入ります。王立の研究室です。1980年にバセゴダ教授が作りしました。なんと研究室はガウディの代表作であるフィンカ・グエルの中です。メンバーはバセゴダ教授と私だけです。彼以前にはガウディをテーマとした研究はありませんでした。研究する内容の有無は、研究者の個性によるんです。教授はガウディ自身の歴史面での裏付け実証を続けていました。学生時代の成績表とかもね(笑)。私の個性はフィールドでのイメージネーションを高めることです。現地に出て実測しては、恵まれた広い研究室に戻って製図板に向かう。それぞれの個性からガウディをつかまえようとするアプローチをしていました。

AMICS バセゴダさんはどんなタイプの教授だったのでしょうか

田中 彼は大学ではあきらかに異質な方でした。大学の研究室にはそれぞれの型があるのが普通です。ところが彼にはそれ



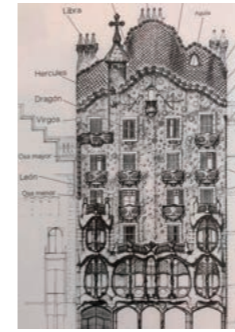
がない。それまで型にはまれない歴史を繰り返してきた自分にはびったりでした。デスクでの教授の記憶力、フィールドでの私の想像力、お互いに型にはまらないやり方です。その代わり、手を取って教えてくれることもない。自分で調べなさい(ある意味では誰が教えるか!)ですから。料理人とおんなじ、職人ですね。また冗談が上手いというか、きついことでも大学では異質さを醸し出していましたね。彼の家族はみんな先生でしたが、祖父ホアキン・バセゴダさんはカサ・ミラに建築許可を出した市の建築主事だったんです。建築物としては違法でも「モニュメントとして認めよう」の許可を出した、そういう人の家系ですから。教授は2012年に亡くなるんですけど遺書を残してくれたんです。「続けてガウディをやりなさい」という遺書でした。えらい荷物を背負いました。

AMICS 好奇心をエネルギーに読み解いたガウディのコード、田中さんは「カサ・パトリヨはサン・ジョルディの物語である」と読み解いていますね。

田中 カサ・パトリヨの立面図に取り掛かったのは1990年です。壁面の円いタイルからはじめて、屋根の樋部分に出て背骨の部分実測をしたとき、珍しいディテールに好奇心が動き出しイメージネーションを重ねました。ひとつだけお話ししましょう。建物全体がどう見えますか?もしかしたらドラゴンなのではないか?ドラゴンは「善と悪」の相関のシンボルです。そしてカタルーニャの伝説では英雄サン・ジョルディ、ギリシャ神話ではヘラクレス、黙示録では大天使ミゲルを相手に登場します。彼らはいずれも地中海が産んだ架空の英雄たちであり、カサ・パトリヨにその劇的なシーンを想像してみたいです。すると1階中央の二本だけ異なる柱は脚に見えませんか。2階のギロチン窓や周囲にある大腿骨の骨のような柱は、生贄が食べられたあとに見えてきませんか。そして鱗状のタイルが敷かれた屋根と尖塔はドラゴンを貫く十字架の柄を持つ剣に見えてきます。

ガウディはこういった作品のコンセプトや意味について「それら

カサ・パトリヨの実測図



の説明や理由を理解できたとき、口外してはならない」と語っています。彼は職人の息子です。作品を作り上げた専門家達の極意というものは簡単に披露するべきではないと考えていたように思えます。イメージネーションを発揮せよ、ということだと思います。

AMICS 2026年に完成と報道されるサグラダ・ファミリアのお話を伺えますか。

田中 2026年には完成しませんよ。いまの建築家はガウディの研究室にいましたがコンピューター上がりの人です。どこまでガウディの事を勉強したのかな。出来上がるのは彼がCGで立ち上げた建物だけです。周りができていないのにサグラダ・ファミリアは完成とは言えません。広場も入り口ゲートもつくって、それならば完成という感じがな。今、サグラダ・ファミリアはテーマパークになってしまう危険性があります。ガウディが目指したのは「完璧なゴシック建築を造る」という事です。どうもその目標を理解していないようにみえる。なんでガウディが次世代に託したのか、それはガウディを読み解き、検証し、ガウディ以上の努力と能力を持ってつくれということ。ガウディ時代とは違うステンドグラスの安直な使い方、遠近法を無視したサイズの彫刻、同じ顔をした天使たち...ガウディが目指した「完ぺきな調和」から遠ざかってしまっているところが残念です。

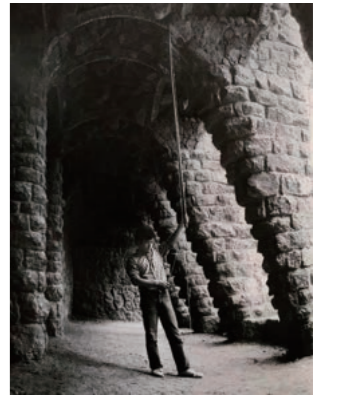
AMICS 好きな場所ということでグエル公園のベンチを挙げられていましたね。

田中 あそこは自然との調和が保たれた場所です。自然と対話できる場所、それこそガウディが目指したものです。自分で選んだ目標に向かって、実測と製図を繰り返すという自分だけのやり方で、収入にはならないひとりの作業を繰り返していました。そんな時、えも言われぬ開放感を手にできた場所です。稚内ですからずっと水平線を見て育ってきたんです。あそこから地中海を見ると故郷への思いもあるし、水平線が画の世界に導くんです。だから私は海のないのは嫌いですね。地中海はガウディのことはキーですけど、彼が地中海人なら、私はやっぱりオホーツク人ですね。

<AMICSの眼>
なんでそうなると思います?の問い掛けが矢継ぎ早にこちらに返ってくる。好奇心を高め、想像力を磨き、応用性を手にする。それをこれからの街づくりをする若い人や年少者に語りたい(社会人はもう遅い)と語っていた。ガウディを続けなさいとの遺言を背負いながら、クスコの実測もスタートさせたとのこと。こちらのエネルギーも測られたようです。

(取材/文 原正彦)

グエル公園で実測する田中氏



協会活動

◎テルトゥーリア開催

去る2018年10月9日に当協会の講演会とパーティー「テルトゥーリア」が東京で開かれました。講演会は、「カタルーニャのダンスー“バストンス”」と題して、バストンス研究家の手塚かおり氏にお話いただき、カタルーニャで学ばれたバストンスの踊りをファミリーで披露していただきました。パーティーでは、講師を囲み、なごやかな雰囲気の中、参加者どうしの交流がすすみました。約35名の参加がありました。



◎カタルーニャ家庭料理教室開催

第三回カタルーニャ家庭料理教室が、12月4日に東京にて開かれました。クリスマスメニューとして、パイと生ハムの前菜、アスクデリヤ、チキンとエビのカタルーニャ風、クレマ・カタラナをレッスンしました。講師は引き続き、カタルーニャ出身のバネッサ・ガルシアさんです。参加者はできたての料理をカバとともに、楽しみました。



◎サン・ジョルディの日イベント予定

4月23日は、カタルーニャ伝統のサン・ジョルディの日。この日に、親しい人との間で本とバラを贈り合うすてきな習慣がカタルーニャにはあります。今年は、セルバンテス文化センター東京との共催でイベントを実施いたします。子供向き読み聞かせ、サン・ジョルディ伝説紹介、講演会、音楽、カバの乾杯、バラの交換会など様々な内容を準備しています。詳細につきましては、追って当協会Facebook等でお知らせいたします。セルバンテス文化センターのホームページからお申込みをしてください。

日 時: 2019年4月23日(火) 16:00~20:00
会 場: セルバンテス文化センター東京
主 催: セルバンテス文化センター東京、
日本・カタルーニャ友好親善協会
参加費: 無料

◎第4回カタルーニャ家庭料理教室予定

近日中に開催予定です。詳細は追ってお知らせします。